

# 平昌へ 選手支える技術

①

パラリンピック



## チエアスキーのシート製作

大阪府中心部のやや東側に位置する大東市に、パラアルペンスキー男子座位で3大会連続の金メダル獲得を狙う狩野亮（マルハン、網南丘高出）が使うチエアスキーのシート（いす部分）のヤスリ掛けやクッション

作りをする会社がある。義肢装具の製造販売をする「川村義肢」だ。

夏の間、狩野は大阪に拠点を移し、トレーニングの合間に同社に通い、シートをヤスリ掛けやクッション

川村義肢（大阪）

## 「究極」求めて共に作業

材の貼り付けなどをしていく。技師の中島博光さん（48）は「選手自身もものづくりに参加する。これが「究極の形」や」と説明する。

中島さんともう一人の技師宮本雄二さん（41）が、樹脂を含ませた炭素繊維やガラス繊維などを何層にも重ねたカーボン素材のシートを作る。

狩野が作業に加わるようになったのは2010年バンクーバー大会後。かなりの部分を任せられるようになったのはここ数年だ。中島さんは「海外遠征で何かあったら、自分で対処できないと困るよろ」とその狙いを話す。

同社が義肢装具作りの技術を基に、シート作りに参入したのは1999年。最初に声を掛けたのが、チエアスキーを始めたばかりの

狩野だった。中学生の狩野の腰回りを計測している写真が、現在も同社に飾られている。

シート素材は、当初は高密度ポリエチレンだったが、2011年ごろからより軽量で強固、なおかつ弾性のあるカーボンに代わった。狩野がパラリンピックで結果を残すのと歩調を合わせるように、同社のシートも進化している。

同社は米国やオランダ、韓国など海外5カ国を含む約100選手のシートを手掛ける。選手ごとにシリアルナンバーが振られており、「001」は今も狩野のシートに付けられている。

平昌冬季パラリンピックが3月9日に開幕する。独自の技術やノウハウで選手やチームのサポートをする企業を紹介する。

（佐藤大吾が担当し、3回連載します）

大阪の川村義肢でチエアスキーのシート作りをする狩野亮（中央）。左は中島さん、右は宮本さん